

栃木県大田原市岩舟台31号墳の鉄刀

― 目釘孔 3 個と鰭本孔を持つ鉄刀の事例 ―

うち やま とし ゆき
内山 敏行

はじめに

- 1 岩舟台31号墳の概要
- 2 鉄刀の特徴
- 3 目釘孔 3 個と鰭本孔の時期と事例

3. 1. 鉄刀の時期

3. 2. 目釘孔 3 個の一文字尻鉄刀と有力古墳
3. 3. 目釘孔 2 個の鰭本孔鉄刀と中規模・小規模古墳
- 4 岩舟台31号墳の評価

おわりに

推定墳径23m以上の規模を持つ円墳の岩舟台31号墳から出土した鉄刀の保存処理が行われたので紹介する。目釘孔3個と鰭本孔を持つ刀として早い時期の例で、上位の倭装大刀と考えることができる。時期は古墳時代中期末から後期初頭で、須恵器編年でTK47～MT15号窯式期を前後する段階に相当する。この刀を出土した31号墳の北側埋葬施設S-35は偏った位置にあり、独立した古墳を作らない副次的な被葬者に上位の刀が副葬される事例である。

はじめに

古墳時代前期の那須地域つまり栃木県域北部では、那珂川上流域の大田原市湯津上と那珂川町小川地域に前方後方墳 6 基が集中して築造されるが、中期前半には那珂川上流域で古墳築造が確認できなくなる。中期後葉から、那珂川上流域で古墳築造が再開する。この背景を考える上で、古墳中期の板甲（短甲）・鹿角装刀剣・上位の倭装大刀・初期馬具・古式須恵器を出土する大田原市岩舟台古墳群は注目すべき遺跡である。その後、後期後半には那珂川上流域で最大規模の前方後円墳 4 基を大田原市湯津上と那珂川町小川・馬頭地域で築造するようになる。

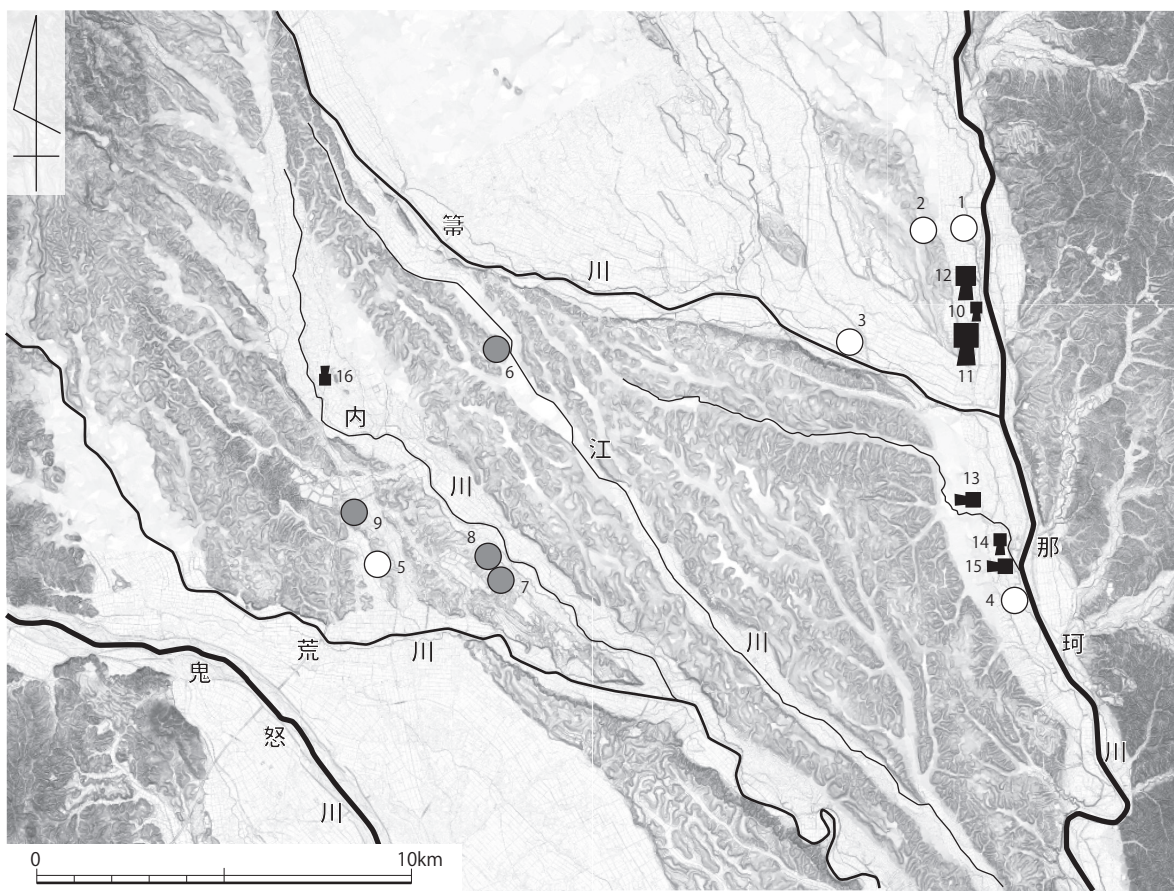
岩舟台古墳群の31号墳（SZ-31）出土鉄刀を含む鉄製品は、報告書作成時にはクリーニング・接合・保存処理が未完了の状態で、形状や特徴を十分に観察・検討できなかった。2024年度に、31号墳出土鉄刀の劣化を防ぐ目的で保存処理が行われた。この結果判明した鉄刀の形状と特徴を紹介する。この鉄刀は、目釘孔 3 個で鰭本孔をもつ鉄刀の出現時期や、その所有者層を考える素材になる。

1 岩舟台31号墳の概要

岩舟台古墳群は、那珂川上流域の栃木県大田原市湯津上に所在する。古墳時代中期を中心とする初期群集墳である。

この地域で、先行する古墳は前期後葉の上侍塚古墳や下侍塚古墳がある。中期前半の古墳は明らかではない。那珂川上流域の湯津上地区や那珂川町小川地区では、中期前半の古墳は姿を消す。中期後葉頃から、大田原市の岩舟台古墳群、酢屋古墳群、蛭田富士山古墳群の 3 か所で古墳築造が再開する（第 1 図○）。

この間を埋める中期前半の古墳は西方地域で、荒川・内川・江川上流域の矢板市・さくら市地域にその可能性がある（第 1 図左）。中期前半の可能性のある主要な古墳として、さくら市鷲宿所在の西原古墳が墳径56m（喜連川町史2003, pp.322-326）、同じく鷲宿所在の中橋 1 号墳が墳径35mで（同前, pp.315-321）、中期前葉



- 古墳中期後半から始まる初期群集墳 1 岩舟台 2 酢屋 3 蛭田富士山 4 谷田 5 乙畑大久保
 ● 古墳中期前半の可能性がある大形円墳 6 篠山古墳(40m) 7 西原古墳(56m) 8 中橋1号墳(35m) 9 愛宕山古墳(35m)
 ■ 古墳前期の前方後方墳 10 上侍塚北古墳 11 上侍塚古墳 12 下侍塚古墳 13 駒形大塚古墳 14 温泉神社古墳
 15 那須八幡塚古墳 16 本幡神社古墳(前方後円墳?) 地図は、地理院タイル・レベル12に河川を記入して作成。

第1図 那珂川・江川・荒川・内川流域の主な前期・中期古墳



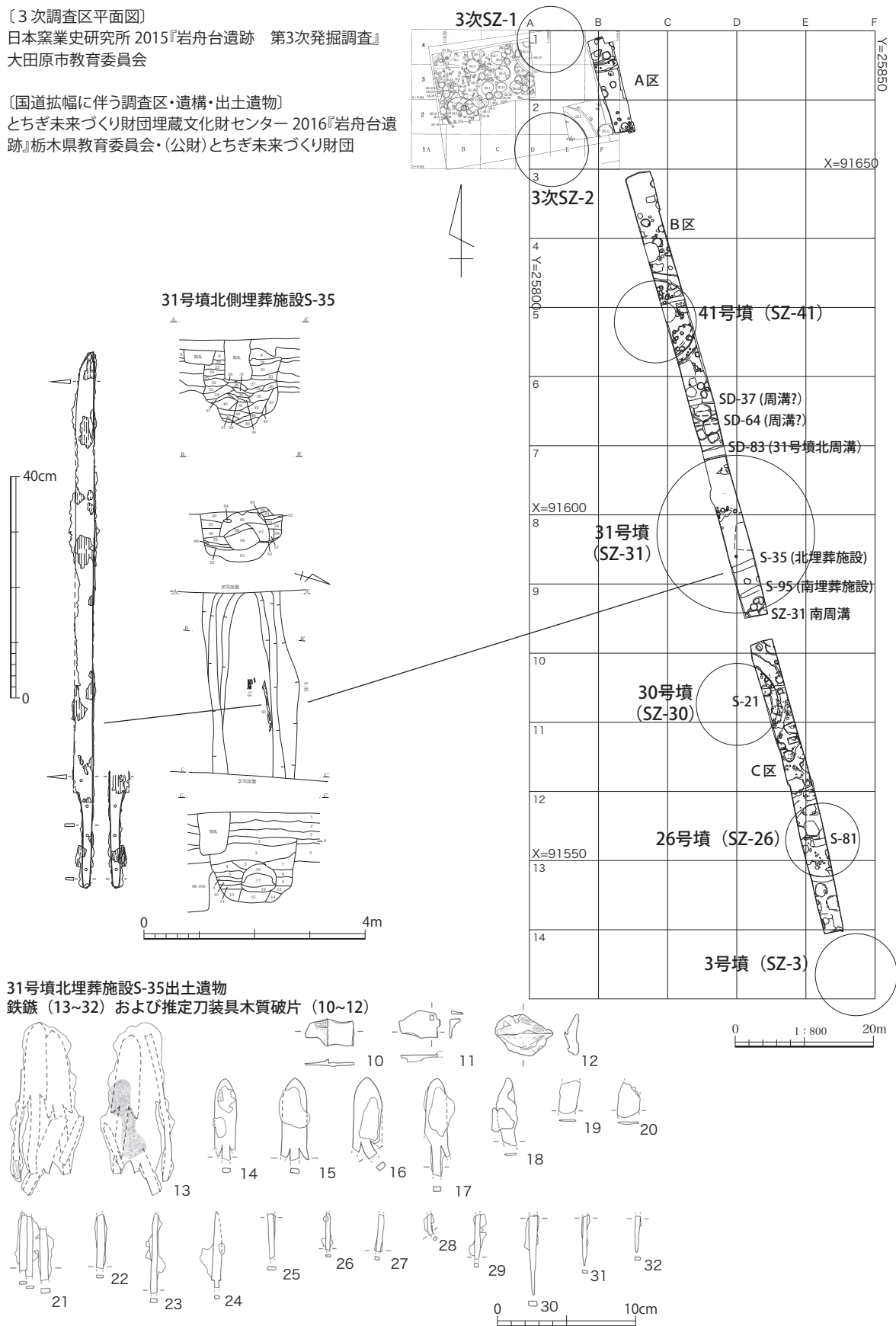
第2図 岩舟台古墳群の位置

〔3次調査区平面図〕

日本窯業史研究所 2015『岩舟台遺跡 第3次発掘調査』
大田原市教育委員会

〔国道拡幅に伴う調査区・遺構・出土遺物〕

とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター 2016『岩舟台遺跡』栃木県教育委員会・(公財)とちぎ未来づくり財団



第3図 岩舟台古墳群および31号墳と出土遺物

から中期中葉頃と推定できる（鈴木2019, p.27）。他に、内川・荒川の上流域では矢板市南部の石関愛宕山古墳が墳径35m（進藤1995, 鈴木・斎藤2008）、江川上流域のさくら市上河戸に所在する篠山古墳が墳径40mで、中期の可能性が指摘されている（鈴木・斎藤2008, 鈴木2020）。

那珂川上流域で中期後葉から古墳築造が再開される背景を考える上で、大田原市岩舟台古墳群は重要な遺跡である。箱式石棺から板甲（短甲）、鹿角装の鉄刀と鉄剣、鉄鏃、斧、勾玉が1922年の道路工事時に出土したが（栃木県1926, pp.21-22）、遺物の大半は現存していない。1979年には高蔵寺208号窯式（TK208）とみられる須恵器甕の写りが紹介された（湯津上村誌1979, p.89）。1998年に湯津上村教育委員会による第1次調査が第3図の西側で行われ、円墳1基の周溝が確認された（海老原2009）。市町村合併後の大田原市教育委員会による第3次調査で円墳2基の周溝が確認された（第3図上の3次SZ-1・2、長谷川・水野・柏崎2015）。

国道294号拡幅工事に伴い栃木県教育委員会・とちぎ未来づくり財団が2014年に調査して（第3図右）、3・26・30・31・41号墳の古墳周溝を調査した。この調査で出土した遺構外出土遺物に鑢^{ひょう}鑢破片があって（篠原2016, pp.221-222, 図版30）、古墳中期の北関東地域に馬利用が波及する過程で那須地域の重要性が浮上してきた状況を示唆している。

岩舟台31号墳（岩舟台遺跡2014年調査SZ-31）は、古墳時代中期末葉または後期初頭と推定される中規模の円墳である。道路拡幅部分で細長く調査された（篠原2016）。墳丘は削平されている。墳丘径23m以上と推定されるが、北側の周溝位置が明瞭ではないために、この推定規模は確実ではない。調査区北部での周溝はSD-83またはSD-37で、さらにSD-64の可能性もあると報告されている。SD-83を周溝の北側と考えた場合の、SZ-31からSD-83間の距離は、調査区東壁で22.0m、調査区西壁で23.0mである。北部の周溝をSD-83ではなくてSD-64またはSD-37と考えた場合には、墳丘規模はもう少し大きく、径28～31m前後になる。調査区南部での周溝（SZ-31）は深さが0.7mで、調査区の制約により溝幅は不明である。

細長い調査区内で、周溝で囲まれた内部の南側に大きく偏って、割竹形または舟形木棺直葬である北側埋葬施設S-35と、木棺直葬の可能性のある南側埋葬施設S-95が調査された。S-35は棺痕跡が明瞭で、特に棺蓋部とみられる黒色土層の16・18・66層が粘性を伴って明瞭に分層されている（第3図左）。ふたつの埋葬施設S-35とS-95が31号墳の南側周溝寄りにある理由として、中央部のS-84の位置を掘り下げることが硬さや礫のために困難で、中央部を避けた結果とも考えられている（篠原2016, p.182）。31号墳は大形なので、墳丘の上部にあった中心埋葬施設が削平時に消滅したと考える余地もあろう。

31号墳の北側埋葬施設S-35の棺底面付近で副葬品が出土した。鉄刀1振と、刀に伴う木製装具(?)小破片3点と、長頸または短頸の腸挟両刃鉄鏃12点以上がある（第3図左）。鉄刀以外は、クリーニング・保存処理が行われていない。

2 鉄刀の特徴

岩舟台31号墳で出土した鉄刀は、2016年の報告書で実測図、写真、X線写真が掲載されている。今回は、保存処理に伴ってクリーニングと接合補修が行われた後の形状・特徴を報告する（第4図・写真1）。

平棟平造りの大形の直刀で、直角片関・先細茎、やや不明確な一字尻である。X線写真で1個認められる鋸本孔は径4.5mmで、刃関よりも刀身中央に寄っている。保存処理の後に計測した刀身全長は97.0cm、刃部長79.7cm、茎部長17.3cm、刃部関幅35mm、刃部幅33～35mm。茎幅は関側で26mm、柄元側で16cm、茎末端で幅8mmまで狭くなる。刃部棟厚7mm、茎部厚5mmである。

ほぼ等間隔で目釘孔が茎に3個ある。関に近い孔から茎末端に向かって上孔・中央孔・下孔と呼ぶと、上孔

径4.5mm・中央孔径4.0mm・下孔径4.5mmである。

刃部と茎部の両面に、鞘木と柄木の木質が残る。目釘孔の中央孔と下孔の中間で、茎の佩表側に付着する柄木痕に径4.5mmの孔痕があるが、現状では目釘孔の位置と大きくずれ、木目の方向も刀身に少し斜行している。この箇所は右で柄木痕の木目が刀身に揃い、図で横線を描いた部分は柄木表面が少し残る可能性がある。目釘は有機質製と考えるが、目釘の木質痕は不明。茎の佩裏側では、刃関から茎側へ17mmの位置で、装具の木質痕の端が直線状にそろって終わる。この木質残存状況が、鞘木の口端を反映する可能性がある。茎の棟の部分には木目痕跡がない。

報告書に記載された「茎元の挟り」は、クリーニング後の所見では認められない。固着したサビと土砂が除去できない条件下でX線写真を頼りに記載・図化したものであり、ここで訂正する。

3 目釘孔3個と鰐本孔の時期と事例（第5図）

3.1. 鉄刀の時期

目釘孔3個で一文字尻茎の鉄刀は、古墳時代中期末から終末期前半まで規格性を保って生産される「一文字d式」鉄刀に含まれる（齊藤2024, p.102; 齊藤2020, p.56）。岩舟台31号墳の鉄刀はこの規格よりも少し小さく、刃関幅がまだ狭いc式なので、「一文字d式」の型式が安定してゆく過程で作られた刀であろう。「一文字d式」鉄刀の規格は全長100～120cm・茎長20cm前後、刃関幅約4cm（齊藤2020・2024のd式）である。岩舟台31号墳の鉄刀は刃関幅3.5cm（齊藤2020・2024のc式）で、長97.0cm・茎長17.3cmである。

鰐本孔をもつ鉄刀が各地に広がる時期は、一文字d式と同じく、古墳時代中期末から後期初頭である。中期末葉、須恵器編年で高蔵寺23号（TK23）～高蔵寺47号（TK47）窯式期に鰐本孔鉄刀が大部分県から三重県までの範囲に少数出土する（桃崎2008, pp.298-299）。後期前半の陶器山15号（MT15）窯式期から、東は千葉県、南は宮崎県まで分布を広げる（齊藤2020, pp.67, 74; 岡安・白杵ほか1986）。ただし、鰐本孔の出現期は古墳時代中期半ばの兵庫県茶すり山古墳例までさかのぼる（齊藤2020, pp.48, 67; 齊藤2024, p.102）。

31号墳は、目釘孔3個・一文字尻茎と鰐本孔の鉄刀が東日本まで分布を広げる初期の事例で、古墳中期末葉または後期初頭であろう。須恵器編年でTK47～MT15期ごろに相当する。中期末葉における「一文字d式」で目釘孔3個の代表的な刀に、TK47期の埼玉県埼玉稲荷山古墳磯礪出土鉄刀がある（鰐本孔無・刃関幅41.5mm、第5図4）。中期末から後期初めにおいて、目釘孔3個・一文字尻茎を持つ刀の製作年代を検討できる熊本県江田船山古墳の銀象嵌有銘鉄刀（鰐本孔有・刃関幅40mm、第5図2）は、490年頃に製作されて江田船山古墳初葬のTK23期より少し後に追葬された可能性がある（桃崎2023, pp.142, 149-150）。

3.2. 目釘孔3個の一文字尻鉄刀と有力古墳

目釘孔3個と鰐本孔をもつ一文字d式の鉄刀は、隅抉d式の鉄刀に比較して、有力古墳に多く副葬される（齊藤2017, p.86; 齊藤2020, p.69）。岩舟台31号墳（円墳 墳径23m以上 鰐本孔有・刃関幅35mm・一文字c式）の性格を考えるための参考事例を示す。刃関幅35～39mmの一文字c式と、刃関幅40mm以上の一文字d式を取り上げる。

金属製刀装具が一般化するよりも前の時期には、一文字d式を大形の倭装大刀に用いる。楔形柄頭の倭装大刀に目釘孔3個+鰐本孔の一文字d式を用いる後期初頭の大府塚ヶ塚古墳刀が好例である。栃木県域では、後期中葉の小山市飯塚31号墳鉄刀4（前方後円墳 墳長29m、鰐本孔有無不詳・刃関幅不詳、第5図6）と、後期後葉の下野市星の宮神社古墳鉄刀（円墳？ 墳径46m以上、鰐本孔有・刃関幅36mm、第5図7）が、目釘孔3個を持つ一文字尻茎の倭装大刀である（鈴木2001, 大金ほか1986）。鰐本孔がない一文字d式を大形



実測図と写真は2024年に保存処理した後の状況。

X線写真は保存処理に伴う接合作業の前に撮影したもので、茎先端部破片は接合後の位置に画像を配置した。

第4図 栃木県大田原市岩舟台31号墳出土鉄刀

の倭装大刀に使う例として、中期末葉の茨城県行方市三味塚古墳（前方後円墳 墳長87.3m）の勾革装飾金具付き鹿角装大刀がある（刃関幅51mm・第5図5）。この刀は目釘孔が2個確認されているが、3個になる可能性がある（忽那ほか2019, pp.17-19, 23）。

金属製刀装具を使う後期中葉以後の刀では、階層が高い銀装大刀や象嵌装大刀に目釘孔3個＋鰭本孔の一文字c式・d式を用いる傾向がある。刀種には、円頭大刀・八窓鏝付大刀を含む。池上（2011a）が集成した鰭本孔鉄刀のC類（片関一文字尻）とE類（両関一文字尻）に含まれる。栃木県域では下記の事例がある。

〔後期中葉〕 片関一文字尻（第6図1）

下野市別処山古墳 前方後円墳 墳長37m 銀装円頭大刀・刃関幅約35mm

〔後期後葉〕 片関一文字尻（第6図2）

下野市上野原2号墳 円墳 墳径30m 八窓鏝付大刀・耳部に圈線c字文金象嵌・刃関幅約4.3cm

〔後期末～終末期前葉〕 両関一文字尻（第6図3・4）

佐野市トコチ山古墳 円墳 墳径34.0～34.5m 八窓鏝付円頭大刀・唐草文銀象嵌・刃関幅40mm

佐野市黒袴台古墳群SZ-29 円墳 墳径18.3m 刀1 八窓鏝付大刀・無象嵌・刃関幅約32mm

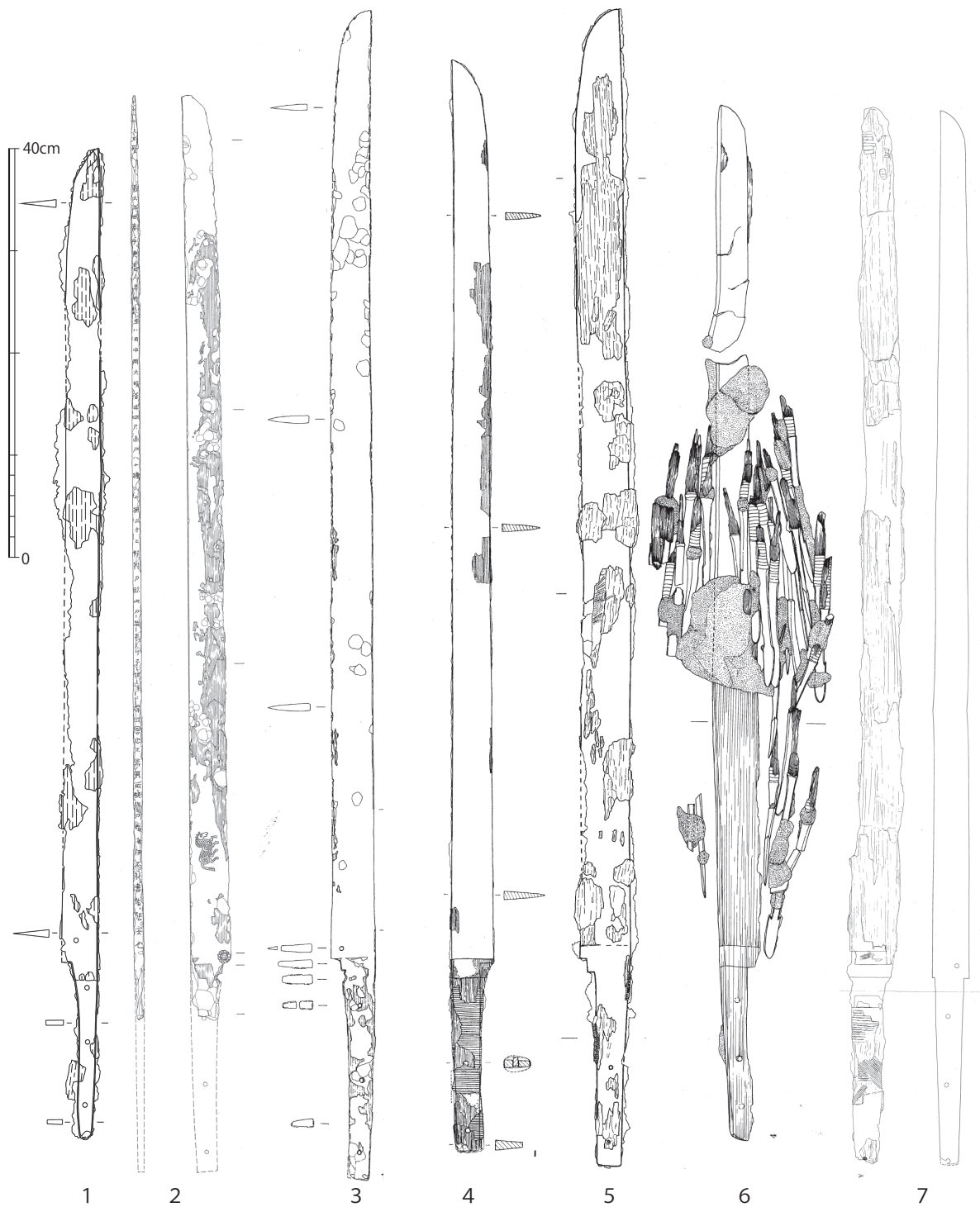
3.3. 目釘孔2個の鰭本孔鉄刀と中規模・小規模古墳（第7図）

鰭本孔を持つ目釘孔2個の一文字尻鉄刀は、栃木県域では後期後葉の群集墳内の前方後円墳と、金銅装大刀や素環轡を伴う終末期円墳で出土している。栃木市西方山6号墳（前方後円墳 墳長約33m 目釘孔2個？・刃関幅約34mmと約30mmの二振）と、足利市足利公園西南部古墳（円墳 墳径12～15m 八窓鉄鏝・金銅装大刀・素環轡伴出、目釘確認数1個・刃関幅34～36mm）がある（折原編2006, 前澤1965）。どちらも片関一文字尻で池上C類に含まれる（池上2011, pp.97, 119）。

鰭本孔を持つ目釘孔2個の隅抉d式鉄刀は、鰭本孔を持つ目釘孔3個の一文字d式鉄刀よりも下位の刀と考えられている（齊藤2020, p.69）。栃木県域では鰭本孔を持つ隅抉尻鉄刀が径10～20mクラスの円墳で出土している。後期中葉の宇都宮市琴平塚9号墳（円墳 墳径17m 刃関幅38mm・隅抉c式）、後期中～後葉の佐野市市の沢12号墳（円墳 墳径16～21m 刃関幅38mm・隅抉c式）、後期末の小山市西高椅50号墳東主体部（円墳 墳径23m 刃関幅40mm・隅抉d式）がある（中村2004, 栃木県古墳勉強会2023, 内山・篠原・中三川2020）。伝小山市絹古墳群出土品（刃関幅約42mm、松浦1981）も鰭本孔を持ち、隅抉d式の可能性がある。池上悟（2011a）が集成した栃木県域の鰭本孔鉄刀12例中ではA類の赤見町出土品が隅抉尻茎で、これは東京国立博物館所蔵の佐野市赤見町字鴻ノ西出土品と思われ、上で述べた市の沢12号墳出土品に該当する。

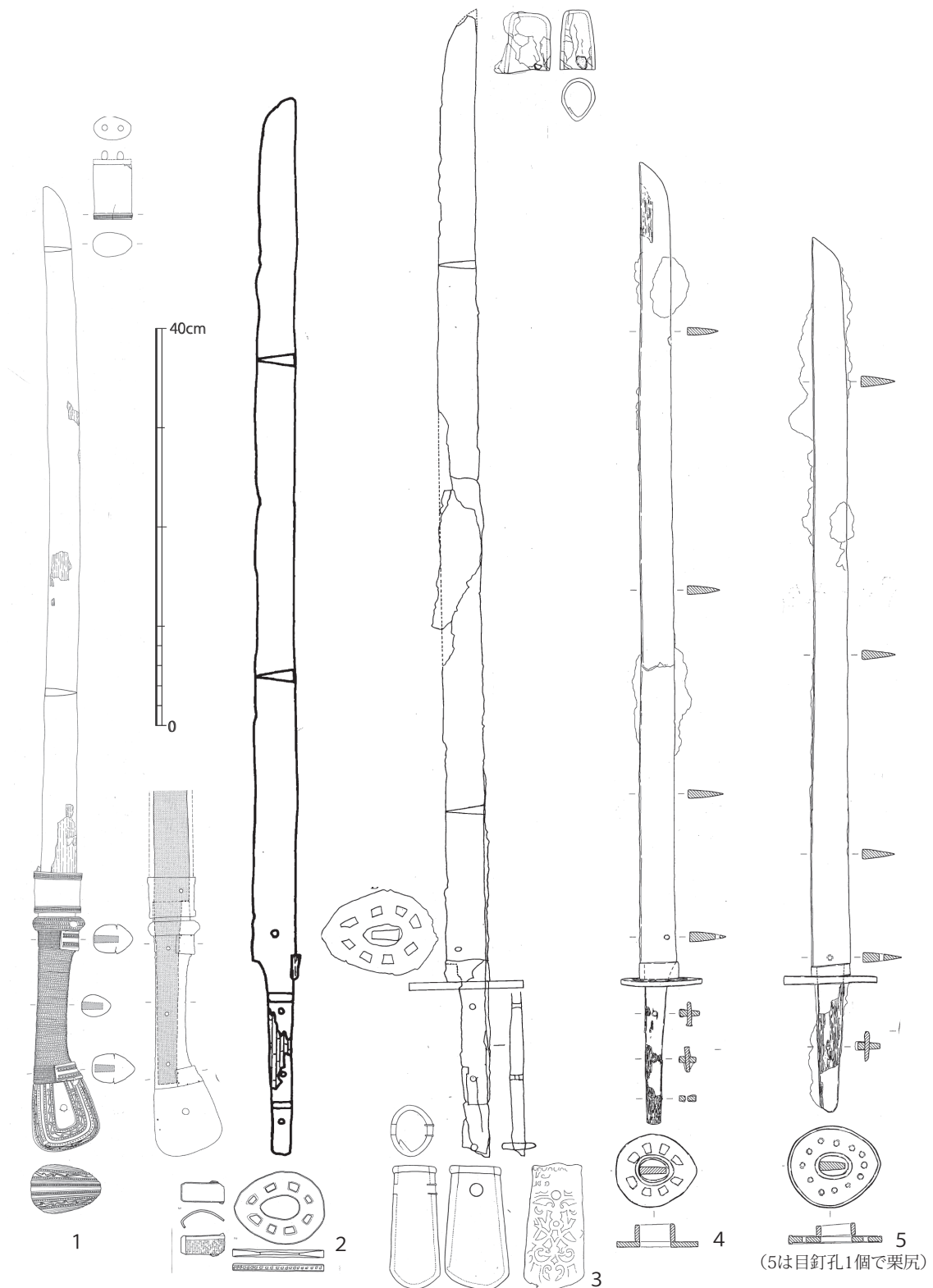
4 岩舟台31号墳の評価

上位の倭装大刀と考えられる鉄刀を副葬した31号墳の北側埋葬施設S-35は、中心から大きく南に偏った位置にあるので、副次的埋葬施設であろう。径23m以上の比較的大きな円墳なので、高い墳丘上部にあった中心埋葬施設は削平時に消滅したと解釈する余地がある。中期後葉から後期前葉の群集墳で、複数の埋葬施設を墳丘の中央と縁辺に配置する事例として、岩舟台古墳群から南西4kmにある大田原市蛭田富士山古墳群D-5東周溝・D-5西周溝・D-15周溝や、西方800mの大田原市酢屋2号墳がある（大和久・竹澤ほか1972, 大川編1978）。南方10kmにある那珂川町谷田1号墳は中期後葉の円墳の頂上に2つの箱式石棺を斜行して配置するので、初葬と追葬が行われたとみられる（青木・山下1986）。古墳中期末には、東京都狛江市亀塚古墳、群馬県大泉町古海原前古墳、栃木県小山市桑57号墳で、優れた副葬品を持つ副次的被葬者を追葬する事例を確



- 1 栃木県 岩舟台31号墳 北埋葬施設S-35 長97/茎17.3/刃関幅3.5cm
 - 2 熊本県 江田船山古墳 残長91/刃関幅4.0cm (東京国立博物館 1993『江田船山古墳出土 国宝 銀象嵌銘大刀』)
 - 3 熊本県 江田船山古墳 長111/茎21/刃関幅4.2cm (菊水町史編纂委員会 2007『菊水町史』江田船山古墳編)
 - 4 埼玉県 稲荷山古墳 礫槲 長110.2/茎17.7/刃関幅4.15cm (埼玉県立さきたま資料館 1980『埼玉稲荷山古墳』)
 - 5 茨城県 三昧塚古墳 勾草飾金具付 鹿角装 長113/茎20/刃関幅5.1cm
(鈴木一有ほか 2019「茨城県三昧塚古墳出土遺物の研究」『明治大学博物館研究報告』第23号)
 - 6 栃木県 飯塚31号墳 長102cm 刃関幅不詳 (小山市教育委員会 2001『飯塚古墳群』III 遺物編)
 - 7 栃木県 星の宮神社古墳 鹿角装 残長103/茎18.2/刃関幅3.6cm (栃木県教育委員会 1986『星の宮神社古墳・米山古墳』)
- 1~3と7は鰭本孔を持つ。5は確認されている目釘孔が2個。6は鰭本孔の有無が不詳、7は茎尻が欠損。

第5図 目釘孔3個を持つ一文字c式・d式大刀の事例



- 1 下野市 別処山古墳 刀身長71.4/茎18.6/刃闊幅3.0cm (南河内町教育委員会 1992『別処山古墳』)
- 2 下野市 上野原12号墳 長106.6/茎約19.5/刃闊幅約4.3cm (南河内町史編さん委員会 1992『南河内町史』史料編1 考古)
- 3 佐野市 トコチ山古墳 残長118/茎残18/刃闊幅4.0cm
(実測図:佐野市史編さん委員会 1972『トコチ山古墳調査略報』 象嵌:佐野市郷土博物館1986『よみがえる古墳』)
- 4 佐野市 黒袴台遺跡SZ-29 刀1 長96.7/茎16.2/刃闊幅3.2cm (とちぎ生涯学習文化財団 2001『黒袴台遺跡』)
- 5 佐野市 黒袴台遺跡SZ-29 刀2 長88.0/茎15.0/刃闊幅2.8cm (とちぎ生涯学習文化財団 2001『黒袴台遺跡』)

第6図 目釘孔3個と鍔本孔を持つ一文字c式・d式大刀 金属製刀装具を伴う栃木県域の事例



- 1 栃木市 西方山6号墳 刀1 長96.1/茎11.5/刃闊幅3.4cm (駒澤大学考古学研究室 2006『栃木・西方山古墳群』)
- 2 栃木市 西方山6号墳 刀5 残長68/刃闊幅3.0cm (駒澤大学考古学研究室 2006『栃木・西方山古墳群』)
西方山6号墳は鉄製円頭・八窓鏝・六窓鏝・無窓鏝があるが、この図の1・2に伴うかどうかは不明。刀は5振出土。
- 3 足利市 足利公園西南部 長113/茎22.5/刃闊幅3.42cm (前沢輝政1965『足利公園古墳群中西南部円墳』『古代』45・46)
西南部円墳には鉄製八窓鏝があるが、この刀に伴うかどうかは不明。刀は3振出土し、金銅装大刀1振を含む。
- 4 宇都宮市 琴平塚9号墳 長86.2/茎17.6/刃闊幅3.8cm (とちぎ生涯学習文化財団 2004『東谷・中島地区遺跡群』4)
- 5 小山市 西高椅50号墳東主体部 長105.1/茎19.1/刃闊幅4.2cm (とちぎ未来づくり財団 2019『西高椅遺跡』2)
- 6 小山市 伝絹古墳群 推定長99.2/茎15.3/刃闊幅4.2cm (小山市史編さん委員会 1981『小山市史』史料編 原始古代)

目釘孔は2個と考えられるものが主体で、4は目釘孔3個。2と6の茎部が一文字尻や隅抉尻になるかどうかは不確実。

第7図 鉤本孔を持つ一文字尻鉄刀(1-3)・隅抉尻鉄刀(4-6) 栃木県域の事例

認できる（小出1985, 石関・橋本・高橋1986, 大和久1972）。

目釘孔3個を持つ一文字d式の大刀が副次的埋葬に伴う状況は、埼玉県稲荷山古墳礫槨出土鉄刀や、熊本県江田船山古墳に追葬された可能性がある銀象嵌銘鉄刀にも認められる。辻田淳一郎は、「独立した古墳を築造しなかった子どもたち」という被葬者像を考えて「江田船山古墳の追葬の副葬品や稲荷山古墳の礫槨被葬者の副葬品のセットが初葬の被葬者の副葬品と時期差を示す可能性があることから、これら追葬の被葬者が初葬の被葬者とは別に独自に入手した可能性が高い」と推定して、「各地域の上位層とその親族などが中央に上番して奉仕した見返りとして威信財〔引用者註：ここでは同型鏡群〕が贈与され、それが各地に持ち帰られた後、地元の古墳に副葬されるというパターン」を考えている（辻田2015, pp.256, 259; 辻田2019）。上位の倭装大刀を副次的埋葬施設に副葬している岩舟台31号墳北側被葬者の性格を考える参考になる。

ただし、鍔本孔をもつ一文字d式鉄刀は、中央政権が贈与（賜与・配布）したものでなく、発注・所有者が主体になって製作した場合がある。稲荷山古墳礫槨出土鉄剣の象嵌銘文や、江田船山古墳出土の一文字d式鉄刀の象嵌銘文によると、ヲワケやムリテのような有力者（地方豪族または中央豪族）が刀剣を作らせている⁽¹⁾。古墳に副葬される優れた刀剣を近畿の王・大王あるいは中央政権が「配布」「賜与」したという意見が、すべてに当てはまるわけではない。王とその臣下・服属者が共同で器物を製作したような場合（森下2004, p.22）も含むのだろう。

おわりに

岩舟台31号墳北側埋葬施設出土の目釘孔3個と鍔本孔を持つ一文字尻鉄刀は、古墳中期末葉から後期初頭ころに、同種の鉄刀が倭で分布する北端域の事例である。上位の倭装大刀と考えられる品が、31号墳で副次的な位置に葬られた人物に副葬されていることは、那須地域と近畿中央政権との関係に関して、埼玉県稲荷山古墳・熊本県江田船山古墳の刀剣銘文で認められる「人制」と各地有力者との関係に類似・関連した状況を考えさせる。

那須地域で中期前半に一時途絶えていた古墳の築造が、中期後葉から再開して、板甲（短甲）、目釘孔3個＋鍔本孔の一文字尻鉄刀を内蔵する上位の倭装大刀、鹿角装刀剣、^{ひょう}鑢轡、古式須恵器などの貴重品が岩舟台古墳群に豊富に副葬される。岩舟台古墳群は、古墳中期末から後期初頭前後の倭および北関東内陸地域の社会を考える上で、貴重な事例である。

執筆後記と謝辞 この鉄刀を調査・報告するに際して、下記の方々から御協力・御教示などをいただきました。

（五十音順）秋元陽光、上野修一、今平昌子、齊藤大輔、篠原浩恵、鈴木志野、長谷川陽。

註

- （1）埼玉稲荷山古墳の金象嵌銘鉄剣を製作した主体はヲワケの臣であるが、江田船山古墳の銀象嵌銘大刀の場合はワカタケル大王の指令を受けて製作し下賜された刀である——と川口勝康（1993）は考えている。『『治天下……大王世』という冒頭表現は年紀表示をあえて切りすてることで、下賜主体の表示』をしたもので、「一見すれば、稲荷山のヲワケの臣と同様に作刀の主体ともみえる典曹人のムリテは、あくまでワカタケル大王の指令を受けている……このように江田船山の大刀銘は、冒頭表現の示すところのワカタケル大王による製作、下賜として理解される。」と述べる（川口1993, pp.340-341）。江田船山古墳出土大刀の銀象嵌銘について、「『大王世』という表現は……いずれも過去の君主の治世をさして用いられている……この大刀銘の作られた時点では、大王はすでに没していたとみる方がよい。」という東野治之（1993, p.67）の指摘に従う場合には、ワカタケル大王が下賜した刀と考えることは難しい

であろう。

中央豪族のヲワケやムリテが有銘刀剣を地方首長に下賜したと考える研究者も多い（杉山1992, pp.170-171; 白石2011, pp.264, 280; 森2014, pp.80, 103など）。この説に対しては、「杖刀人」の首として王権に奉仕したヲワケ本人の功績を顕彰する特別の意味を持つ剣を他人に譲渡することは考え難い——という批判がある（佐藤2004, pp.37-39; 義江2011, pp.26-30; 田中2013, pp.254-255など）。江田船山の鉄刀にも同様の議論がある（佐藤前掲; 篠川1988, pp.103, 107）。

参考文献 五十音順

- 青木健二・山下守昭 1986『栃木県小川町 大森遺跡 谷田1号墳』小川町教育委員会（栃木県那須郡）
- 池上悟 2011a「東国後期古墳出土大刀の様相」『立正大学大学院紀要』第27号 東京, pp.95-133
- 池上悟 2011b「東国古墳出土の刃関孔大刀」『栴檀林の考古学』大竹憲治先生還暦記念論文集刊行会 東京, pp.235-246
- 石関伸一・橋本博文・高橋詔徳 1986『古海原前古墳群発掘調査概報』大泉町教育委員会（群馬県邑楽郡）
- 岩崎浩恵・篠原祐一・進藤敏雄（栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター編）1995『乙畑・大久保古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第159集 宇都宮
- 白杵勲 1984「鰐本孔を持つ鉄刀について」『考古学研究』31（2） 考古学研究会 岡山, pp.97-106
- 内山敏行・篠原浩恵・中三川渉編（とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター編）2019『西高椅遺跡』2 小山市・とちぎ未来づくり財団 小山, pp.144-149
- 海老原郁雄 2009「那須野が原 岩舟台遺跡の縄文後期墓坑群」『野州考古学論攷』中村紀男先生追悼論集刊行会 宇都宮, pp.193-208
- 大金宜亮・岩淵一夫・大橋泰夫・田代隆・木村等（栃木県文化振興事業団編）1986『星の宮神社古墳・米山古墳』, 栃木県埋蔵文化財報告書第76集 宇都宮, pp.26, 28, 31
- 大川清編（日本窯業史研究所編）1978『栃木県湯津上村 酢屋古墳群』湯津上村教育委員会 湯津上（栃木県那須郡）, pp.14-22
- 大和久震平 1972『桑57号墳発掘調査報告書』小山市教育委員会・（株）小山カントリー倶楽部 小山
- 大和久震平・竹澤謙・常川秀夫・大金宜亮（栃木県教育委員会編）1972『蛭田富士山古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第6集 宇都宮, pp.14-17, 20-21
- 岡安光彦・白杵勲・近江かおる・太田浩司 1986「江田船山古墳象嵌銘鉄刀の製作年代」『考古学研究』32（4） 考古学研究会 岡山, pp.107-117
- 折原覚編（駒澤大学考古学研究室編）2006『栃木・西方山古墳群』 東京, pp.28, 30
- 川口勝康 1993「刀剣の賜与とその銘文」『岩波講座 日本通史』第2巻 古代1 岩波書店 東京, pp.331-348
- 菊水町史編纂委員会編 2007『菊水町史』江田船山古墳編 和水町（熊本県菊池郡）, pp.91, 92, 106, 108
- 喜連川町史編さん委員会編2003『喜連川町史』第一巻 資料編1 考古 喜連川町発行（栃木県塩谷郡）, pp.315-326, 348-351
- 忽那敬三・佐々木憲一・鈴木一有・太田雅晃・岩本崇・沢田むつ代 2019「茨城県三味塚古墳出土遺物の研究」『明治大学博物館研究報告』第23号 東京, pp.1-54
- 小出義治 1985「第2編 原始・古代 第5章 亀塚古墳」『狛江市史』狛江市史編さん委員会編・狛江市発行 狛江, pp.119-188
- 齊藤大輔 2009「鰐本孔鉄刀の基礎的研究」『第3回東アジア考古学会・中原文化財研究院 研究交流会 予稿集』東アジア考古学会・中原文化財研究院 福岡, pp.1-29
- 齊藤大輔 2017「古墳時代中期刀剣の編年」『中期古墳研究の現状と課題Ⅰー広域編年と地域編年の齟齬ー』, 中国四国前方後円墳研究会第20回研究集会 徳島, pp.73-88
- 齊藤大輔 2020「第3章 鰐本孔鉄刀の性格と展開」『古墳時代の武装と境界領域』福岡大学大学院人文科学研究科史学専攻考古学専修 令和元（2019）年度 博士学位申請論文 [文学], pp.65-74. 参照:2004-01-06福岡大学機関リポジトリ <https://fukuoka-u.repo.nii.ac.jp/records/5046>

- 齊藤大輔 2024「刀剣やり鉾」『中期古墳編年を再考する』六一書房 東京, pp.93-104
- 斎藤忠・柳田敏司・栗原文蔵他(埼玉県立さきたま資料館編) 1980『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会 浦和
- 齋藤史・高野浩之(山武考古学研究所編) 2005『栃木県湯津上村 岩舟台遺跡―第2次発掘調査―』湯津上村教育委員会, 湯津上(栃木県那須郡)
- 斎藤光利・秋元陽光・大橋泰夫編 1992『別処山古墳』南河内町教育委員会(栃木県河内郡)
- 佐藤長門 2004「有銘刀剣の下賜・顕彰」『文字と古代日本』1 支配と文字 吉川弘文館 東京, pp.25-42
- 篠川賢 1988「鉄刀銘の世界」佐伯有清編『古代を考える 雄略天皇とその時代』吉川弘文館 東京, pp.80-114(篠川賢 1996『日本古代国造制の研究』吉川弘文館に「五世紀後半の政治組織」として改稿収録)
- 篠原浩恵(とちぎ未来づくり財団埋蔵文化財センター編) 2016『岩舟台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第378集 宇都宮, pp.178-189
- 白石太一郎 2011「II-8 五世紀の有銘刀剣」『古墳と古墳時代の文化』塙書房 東京, pp.239-286(1997「有銘刀剣の考古学的検討」『歴博大学院セミナー 新しい史料学を求めて』吉川弘文館 東京を収録)
- 進藤敏雄 1995「矢板市南部の群集墳について」『唐澤考古』第14号 唐澤考古会 佐野, pp.15-22
- 進藤敏雄(栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター編) 1996『小丸山古墳群 山苗代A・C遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第177集 宇都宮
- 杉山晋作 1992「有銘鉄剣にみる東国豪族とヤマト王権」『新版古代の日本』第8巻 関東 角川書店 東京, pp.149-179
- 鈴木一男(小山市教育委員会編) 2001『飯塚古墳群』III―遺物編― 小山市文化財調査報告書第44集 小山, pp.130, 219
- 鈴木勝 2019「喜連川・西原古墳について」『氏家喜連川 歴史と文化』第18号 氏家喜連川歴史文化研究会 さくら, pp.25-27
- 鈴木勝 2020「喜連川・篠山古墳について」『氏家喜連川 歴史と文化』第19号 氏家喜連川歴史文化研究会 さくら, pp.26-29
- 鈴木勝・斎藤弘 2008「第五章 古墳時代の喜連川 第二節 古墳文化の展開」『喜連川町史』第六巻 通史編I 原始・古代 中世 近世 さくら市発行, pp.108-142
- 田中史生 2013「倭の五王と列島支配」『岩波講座 日本歴史』第1巻 原始・古代I 岩波書店 東京, pp.236-270
- 筑波大学甲山古墳研究グループ(滝沢誠ほか) 2019「つくば市甲山古墳の研究―調査報告編―」『筑波大学先史学・考古学研究』第30号 筑波大学人文社会科学研究科 歴史・人類学専攻 つくば, pp.27-104
- 辻田淳一郎 2015「古墳時代中・後期における同型鏡群の授受とその意義―山の神古墳出土鏡群の位置づけをめぐる―」『山の神古墳の研究』九州大学大学院人文科学研究科考古学研究室 福岡, pp.248-262
- 辻田淳一郎 2019「第五章 倭の五王の時代における鏡の政治利用―古墳時代中期 七 古墳時代中期後半の同型鏡群の拡散と鏡の授受」『鏡の古代史』角川選書630 株式会社KADOKAWA 東京, pp.316-333
- 東野治之 1993「IV 銘文の釈読」『江田船山古墳出土 国宝 銀象嵌銘大刀』吉川弘文館 東京, pp.62-69
- 戸田有二 1975「第四章 佐野の古墳 4 トコチ山古墳」『佐野市史』資料編1 原始・古代・中世 佐野市発行, pp.164-220
- 栃木県 1926『栃木縣史蹟名勝天然紀念物調査報告』第一輯 栃木県 宇都宮, pp.21-22
- 栃木県古墳勉強会 2023「佐野市市の沢古墳群測量調査報告1―12号墳の調査―」『栃木県考古学会誌』第44集 宇都宮, pp.57, 59, 60
- 中村享史(とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター編) 2004『東谷・中島地区遺跡群4 琴平塚古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第283集 宇都宮, pp.135, 142
- 橋本澄朗・芹澤清八・仲山英樹・斎藤恒夫・竹前大輔(とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター編) 2001『黒袴台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第261集 宇都宮, 第3分冊pp.79-103,
- 長谷川操・水野順敏・柏崎広伸(日本窯業史研究所編) 2015『岩舟台遺跡 第3次発掘調査』大田原市埋蔵文化財調査報告第2集 大田原市教育委員会 大田原

前澤輝政 1965 「足利公園古墳群中西南部円墳」『古代』第45・46合併号 早稲田大学考古学会 東京, pp.41-50

松浦有一郎 1981 「第4節 古墳時代ならびにそれ以降の遺物 四 武器」『小山市史』史料編 原始古代 小山市発行, pp.740, 743

森公章 2014 「国造制と屯倉制」『岩波講座 日本歴史』第2巻 古代2 岩波書店 東京, pp.75-106

森下章司 2004 「鏡・支配・文字」『文字と古代日本』1 支配と文字 吉川弘文館 東京, pp.10-24

桃崎祐輔 2008 「江田船山古墳遺物群の年代をめぐる予察」菅谷文則編『王権と武器と信仰』同成社 東京, pp.287-312

桃崎祐輔 2023 「江田船山古墳遺物群の年代再論」『古代騎馬文化受容過程の研究〔日本編〕』同成社 東京, pp.128-150

山ノ井清人（南河内町史編さん委員会編）1992 「上野原12号墳」『南河内町史』史料編1 考古（第五巻）南河内町発行（栃木県河内郡）, pp.414-442

湯津上村誌編さん委員会編1979「第二編 歴史 第一章 考古学上からみた湯津上地方」『湯津上村誌』湯津上村発行（栃木県那須郡）, pp.37-90

義江明子 2011 「第一章 系譜」『古代王権論－神話・歴史感覚・ジェンダー』岩波書店 東京, pp.3-71